

解説

磯部 加代子



はじめに言葉があった。
言葉は星たちの階層にあつた。このことは、聖なる書物より前に、詩人や叙事詩人たちが言っていたこと

だ。彼らは言うだけに留まらなかつた。星たちの階層にあつた言葉をもぎ取って、地上に降ろしてきた。それから、地上で痛みや恐怖や希望で捏ね上げられた存在としてほつき歩いていく人間に、この言葉なるものを使って、人生の別の顔を示してみせたのだつた。

(二〇一五年三月四日、ブルハン・ソンメズによるヤシヤル・ケマル追悼記事の冒頭 www.evrensel.net)

ブルハン・ソンメズの小説を読んでいると、言葉というものについて、思いを巡らせることがしばしばある。究極的には、言葉を連ねているだけのページの重なりが、時に深い哲学的思索へといざない、時に肉体的な痛みを感じてい

るような錯覚に陥らせ、歴史の端から端まで読者を連れ去る。

これまでに出版された三冊の小説『北』(Kuzey, 二〇〇九年)、『純真な人々』(Masumilar, 二〇一一年)、『イスタンブル・イスタンブル』(İstanbul İstanbul, 二〇一五年)はそれぞれ趣向の異なる小説だが、いずれも「物語の中に物語」方式の、クルド文学、あるいは中東の文学作品ではおなじみの、物語の中心がいくつもあるような、読者を混乱に陥らせながらも魅了してやまない小説たちである。二作目で当時として最年少(四十六歳)で、国内の文学賞であるセダット・セマーヴィ文学賞を受賞した。

作家としてアクティブに活動する傍ら、中東工科大学で文学の授業を担当している。また、最新作『イスタンブル・イスタンブル』出版後間もない二〇一五年二月には、翻訳小説を多く出版するアイルントウ出版の総編集長に就任するという、異例の事態となった。実はこの出版社は、本文学選で紹介したエキンジがプロデュースする、クルド文学翻訳プロジェクトの「イロー・ブックス・シリーズ」を出版する出版社である。トルコ・クルド文学界の若き才能二人が、タッグを組んだ形である。

作品に負けず劣らず、作家本人の経歴も一風変わっている。ブルハン・ソンメズ(Burhan Sonmez)は、首都アンカラ県に属するハイマ

ナの、クルド人の村に一九六五年に生を受けた。村に電気が通つたのは彼が十五歳のとき。しかし、当時の電気のない生活は小説家としての自分にとつてのアドバンテージになった、と語っている。ガス燈の明かりのもとに家族が集まり、母が母語であるクルド語で語る精霊の物語や、男女の駆け落ちの物語。その時培われた物語力が、彼の作家としての方向性を決定づけている。ソンメズが文学の言語として使用しているのはトルコ語だが、彼の物語を支えているのは母語であるクルド語の、トルコ語とは全く異なる音を持つ物語の数々だつた。

その後、近隣のポラトルの町に一年の半分だけ学校のために移動し、あとは村で過ごすという遊牧民的生活を送り、大学入学と同時にイスタンブルに上京。法学部を出て弁護士資格をとつたが、警官から受けた暴力により頭蓋骨骨折という大怪我を負つた。この怪我の後遺症の治療のため、英国の「拷問治療センター」で治療を受けた。

英国での滞在は長引き、英語の通訳の資格まで取得。「先史時代の犬ども」で登場する通訳のように、彼もまた、様々な事情を抱えた自国の人々の言葉を受け取り、英語に翻訳するという仕事をしてきたのかもしれない。

彼の患つた後遺症は、不眠症や「夢を見れなくなったこと」だつた。これらは、自身の処女

作『北』と、二作目の『純真な人々』で描かれているテーマでもある。「先史時代の犬ども」に出てくる、デルスイム出身の自殺未遂を繰り返すイエスマもまた、英国に来てから不眠に悩まされていた。

ソンメズは、現在もイスタンブルとケンブリッジを行き来する生活を送っている。しかし、ソンメズ本人が最後に息を引き取りたい場所は、そのどちらの町でもなく、「間違ひなく故郷の村」だという。

降りしきる雪の中、来るはずもない想い人を窓辺で待ちわびる女の心情を歌った流行歌「見渡す限りの雪」で幕を開ける作品「先史時代の犬ども」は、「叔母さん」、イエリダ、イエスマの三世代のデルスイムの女たちの話である。

はじめに自殺未遂を繰り返すイエスマ（孫）、次に「叔母さん（祖母）」という順番で二人の語り手を配置したことで、読者は一瞬錯覚を覚える。果たして、どちらの物語がどちらのものだったか？そして、この二人の女に挟まれている、イエリダ（母）とは、誰にとつての誰だったか……？

過去から未来に続く一続きの物語として読むような読み方は、あらかじめ封じられている。また、ほんの数ページの中に多くの登場人物がいることも、物語の複雑化に貢献している。「物

語の中に物語」つまり、入れ子構造の書き方はソンメズらしい書き方だが、たった数頁の中にエッセンスをこれでもかと盛り込むのもまた、極めて彼らしい。

あるインタビューで、あまりにも多くの物語が一冊の小説に詰め込まれているのでネタ切れになるのではないかと問われ、「軽くあと二十冊の小説が書ける」と、あっさり答えている。ガス燈の明かりのもとで語られた物語によって磨かれたソンメズの感性にとつてみれば、物語の在庫は無限だ。あとは、それをどのように小説として書き起こすのか、だ。

星たちの階層から言葉を地上に降ろしてくるのが、詩人の役目であるならば、「叔母さん」が大切にしていたYの文字が詩人のジェマル・スレヤから届けられたのも、当然だろう。「叔母さん」にとつても詩人ジェマルとの出会いは大きかったようだが、筆者にとつても本作品でジェマル・スレヤを知ることができ、これは一つの大きな出会いとなった。

一九三七年から一九三八年のデルスイムの虐殺（あるいはデルスイム側から見た場合、それはデルスイムの抵抗）は、何もその時に始まりその時に追わる、期限付きの出来事ではない。

「叔母さん（祖母）」の世代がいわゆる「デルスイムの虐殺」の犠牲者になるのだが、冒頭語られる孫のイエスマの経験が、一九三八年の出来

事だとしてもまったく違和感がない。

三世代にわたり続く暴力とは、一体何なのか。それは、非トルコ人に対する同化政策というトルコ共和国における未完の暴力である。今なお、故郷を追われた者たちの尽きぬ望郷の念、凄惨な流血の記憶、複雑なアイデンティティといった、数えきれない痛みを生み出し続けている。そしてそれらは常に、クルド文学におけるメインテーマであり続けている。

人間としての尊厳、人間性そのものが否定されたとき、人はどうなるのか。十字架を背中にくり付けられたら、その先どのように生きればいいのか。「先史時代の犬ども」の物語の中では、一人は死に、一人は死のうとし、一人は笑い続けた。笑いはいびに似ている——。そう言ったのは、交通事故にあつてから、創作活動を行えなくなった漫画家岡崎京子だった。「生きていく間ずっと傷口を隠して」いるには、叫び続けるわけにはいかない。叫んだら、その衝撃で傷口が裂けてしまうから。

人生のほとんどを英国の地で過ごした「叔母さん」の物語が、間もなく静かに幕を閉じようとしている。その長い人生がどのようなものだったのか、そのほとんどを私たちが知らない。忘れる以外になかった人生のことを、私たちが知る由もない。彼女が笑い続けた以外のことは。